

特 249

64

582

537

水戸學と其の朗誦
水戸黃門公と大日本史

水戸彰考館

雨

谷

毅

3

6

始



特249
5R

目次 (ラチオ講演集)

水戸學と其の朗誦 (一)

「梅里先生碑文」(西山公)

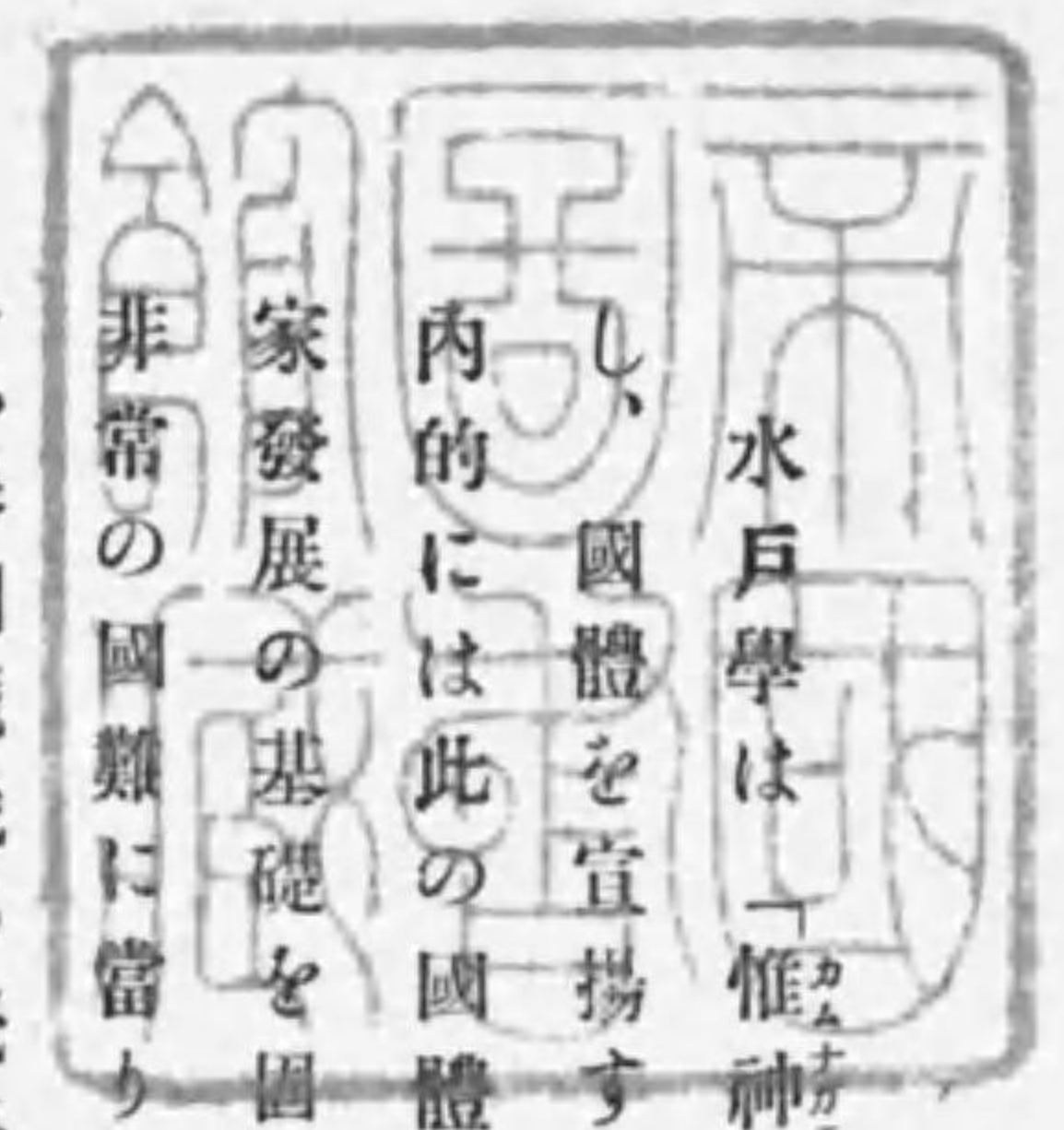
水戸黃門公と大日本史 (二)

「正氣歌」(東湖先生)

感想芳信 (三)

水戸學と其の朗誦

雨谷 毅



水戸學は「カミナガラ惟神の道」を體しまして、國體を闡明し、國體を擁護し、國體を宣揚することを以て目的とする學風であります。故に對内的には此の國體精神を以て國民を統一し、打つて一丸となし、國家發展の基礎を固めます。對外的には此の舉國一丸的精神を以て、非常の國難に當りまして、假令それが久しきに亘ると雖も屈せずして、舉國籠城の覺悟と勇氣とを以て斷然之を突破せんことを期します。

惟ふに方今は外に向つて大に此の國體精神を宇内に宣揚するの時代であります。されば水戸學も亦此の時代の潮流に参加しまして、其の精神意氣を鼓舞振作する所の一方の使命を負ふべきものであら

うと思はれます。然らば其の國民精神とは一体如何なるものでありますか、即ち非常時の場合には君國に殉ずるの精神であります。此の精神は何處から出て來るのでありますか、之れは日本國家の本質より出で來るものであります。

我日本は民族が大體同一種であります。よし多少の細流末流はあるにしても、大體に於きまして同一種族であります。そして何千年か此の同一の島國生活をして居りまして他へ流れ出ないで團結した生活をつゞけて來て居るのであります。従つて血液が同一であつて外國に於ける他民族の様に血がいろ／＼と混つて居りません。此の點から見ますれば全く血族關係、血縁關係の民族であります。此の血の同一關係から來る所の我が民族意識は他の國民意識と違つて一種強烈にして、そして純眞なる家族的純情を持つて居る所の國民意

識であります。此の如き民族であるから一家が大きくなつて國となるが如く實に一大家族的の國柄であります。之を内在的に見ますれば畏れ多くも皇室が其の中心にわたらせらるゝ事が即ち世界に比類なき國體の具現せる所以であります。恰も一家に父のある如きであります。故に「義は君臣にして情は即ち父子」と仰せらるゝのは此の事であらうと存せられます。

それで之は總てが血の關係に本つぎまして成り立つ所の國家組織であるから、此の獨特なる國家の本質を明かに致し、國民の意識を統一して、そして舉國一團となりて進む事が最も大事な事であらうと思はれます。又此の意識精神が對外的に發現したる場合には最も強烈に出るのであります。即ち往古の三韓征伐が其れであります。元寇の時も其れで撃破したのであります。豊太閤の朝鮮征伐も其の

精神の發露であります。降つて日清日露の戦役も歐洲大戰の時も其の精神で當つたのであります。而して悉く皆國威を海外に輝して居るのであります。之れが古來より未だ曾て一寸の土地も他の侵畧を許さざる實に非征服國民即ち「金甌無缺」の國柄である所以であります。

此の如く内には「萬世一系」の皇室を戴き、又外に對しては舉國一丸となつて、此の「金甌無缺」の國體を護ります。今又聯盟脱退後の此の非常時局に處しまして、却つて益々この傳統的精神と意氣とを發揮致し、そして曩に煥發し賜はつた御詔勅の聖旨を奉戴致しまして、我々は一層其の進路を明瞭に意識し、又益々奮つて國事に殉ずるの氣概と勇氣とを養ふ事が急務中の急務と存じます。

水戸學は此の固有の精神を基調とし、之を學問化しそして國體學を建設したのであります。故に一面此の學風に依りまして國家の根本思想を健全に養ひ、又一面には水戸學朗誦と云一種の聲調によりまして、端的に理窟なしに民族精神の一部に觸れしむることが前に述べた通り此の非常時に處しまして、最も痛感する精神作興及統一上に就ての必要なる一方法であらうと思はれます。

只惜い事には斯様な精神教育の方面に關しまして、現代教育は從來何となく物足らぬ様な感じが致します。即ち智識教育は致して居りますが、精神的に感せしめる教育が缺けて居る様に思はれます。それは精神氣分の教育即ち感じの出る純情教育が不足してゐるからではないでせうか、即ち正情、意志の修養鍛鍊の方法が比較的缺けて居るのではないでせうか、此の際餘程喫緊に考慮を要する問題であらうと思はれます。

殊に我々純日本の精神氣分の「本來的」のものは何であるかと問はれたならば、現代の如き各種各様の氣分殊に海外各國の思想氣分が雜然と混入する時などは、何が何んだかさツパリ分らなくなつて參ります。即ち純なる「大和心」を忘れて居る人などが可なり多くなつて參ります様です。時適々此の朗誦の響きの如き者が風の如くフウハリとして參りますと、始めていひ知れぬ懐しみが起つて參る様であります。此の氣分が即ち日本精神の匂ひであります。つまり此の聲を通して日本國體の姿の氣持がハッキリと寫ります。而して此の氣分は學問的では中々分らないのであります。譬へば國體精神國民精神の結晶とも代表とも云ふべき内容ある古來の名文章の類を朗誦することに依つて始めて其の精神氣分が自然と出て來てそして其の精神的に何物かの正しき刺激を受くるのであります。

此の點より見ますれば、朗誦は精神教育的の者であつて、殊に國民精神の根本に觸れる感化訓育に關する頗る重要性を持つた者であります。併し朗誦は詩吟の如く強烈味のものではありません、又歌謠の様な、やはらかなものでもありません、要は吟するにあらず、謠ふにあらず、自然に朗誦的格調が備つて居るのであります。

今回は只た水戸風朗誦の型丈けを致して見ます。それで本日は藤田東湖先生の正氣の歌を朗誦して見ますが全く詩吟調ではありません、即ち朗誦調であります。併し此の正氣の歌が純粹の朗誦調とも少し違ふ所があります。つまり詩吟と朗誦との中間を行く調子であります。又此の歌は朗誦調の方では二句を一句として讀むのが定法であります、即ち「天地正大の氣、粹然神州に鐘る」迄を一句の氣持で讀むのであります。元來かく讀む方が本當の讀方であらうと思ひ

八
ます。即ち二句を一句として読みまして始めて其の意味がまとまります。以下其の氣持で読みますから左様御承知を願つて置きます。又此の正氣の歌の訓讀も區々になつて居りますが、今回は大抵普通の讀方に従ひました。

正氣の歌

東湖先生

天地正大の氣粹然神州に鐘る、秀でては不二の嶽となり巍々千秋に聳ゆ、注いでは大瀛の水となり洋々八洲を環る、發いては萬朶の櫻となり衆芳與に儔ひし難し、凝つては百鍊の鐵となり銳利鑿を斷つべし、蓋臣皆熊羆武夫盡く好仇、神州孰か君臨し給ふ、萬古天皇を仰ぐ、皇風六合に洽く明德太陽に伴し、世汚隆なくんばあらず正

氣時に光を放つ、乃ち大連の議に參して侃々瞿曇を排す、乃ち明主の斷を助けて燄々伽藍を焚く、中郎嘗て之を用ひて宗社磐石安し、清丸嘗て之を用ひて妖僧肝膽寒し、忽ち龍口の劍を揮つて虜使頭足分れ、忽ち西海の颯を起して怒濤胡氣を殲す、志賀月明の夜陽に鳳輦の巡を爲し、芳野の戰酣なるの日又帝子の屯に代る、朗吟調「或は投せらる鎌倉の窟憂憤正に恨々たり、或は伴ふ櫻井の驛遺訓何ぞ慇懃なる、或は殉す天目の山憂囚君を忘れず、或は守る伏見の城一身萬軍に當る、朗誦調承平二百歳斯氣常に伸ぶる事を獲たり、然れども其爵屈するに當つては四十七人を生ず、乃ち知る人亡びたりと雖英靈未だ嘗て泯びず、長く天地の間に在つて隱然彝倫を叙つ、誰か能く之を扶持するや卓立す東海の濱、忠誠皇室を尊び孝敬天神に事ふ、修文奮武を兼ね誓つて胡塵を清めんと欲す、一朝天步艱み邦君身先

一〇
づ淪む、頑鈍機を知らず罪戾孤臣に及ぶ、孤臣葛藟に困しみ君冤誰
に向ふてか陳べん、孤子墳墓に遠ざかる何を以てか先親に謝せん、
往萬二周星唯斯氣の随ふあり、嗟予萬死すと雖豈汝と離るゝに忍び
んや、屈伸天地に付し生死又何ぞ疑はん、生きては當に君冤を雪い
で復綱維を張るを見るべし、死しては忠義の鬼となり極天皇基を護
らん。

水戸黄門公と大日本史

雨谷毅

私が雨谷毅であります。本日は日本の鎮め、護國の鬼となられた
御祭神靖國神社の大祭日でありまして、永へに其の英靈の安らかに
まさんことを此の壇上より祈つて已まぬ次第であります。

さて本席の講演は、「水戸黄門公と大日本史」と云ふ演題でありま
すが、この講演を御聴き下さる皆様方は、定めし水戸學と云ふことに
ついて、兼々御聴き及びになつて居られる事と思ひます。殊に近頃
は水戸の學問がどうの、水戸の精神がどうのと、世の中に大分騒が
れて参りましたが、さてそれならば、水戸學とはどんなものか、手

つ取り早く聞かせてくれぬかと、よくかういふ質問をうけますが、して見ると水戸學と云ふ言葉は、割合にひろく傳つて居ると見えまゝす。然らば水戸學とはどんなものか、つきつめた處に至りますと、ごく少數の方々以外には、まだ分つて居らぬ様子であります。そこで私は水戸學を形の上に現はして見せてくれと云ふ御質問に對しては、何のためらふ處もなく、これが水戸學だと、直に皆様方の眼の前に差出して、御覽に入れるものがあります。それは何であるかと申せば、「大日本史」であります。それが全部で、三百九十七巻の大著述、この中に水戸學の魂が打ちこんであり、又水戸學の眞精神がこめられてあります。併し茲に御斷りして置きたいのは、「大日本史」は國の歴史でありますが、之を水戸學的に取扱つたと申す事でありまゝす。故に此の「大日本史」を讀めば水戸學精神がよく分ると云ふ

事を御承知になつて戴きたい。

二

さて皆様方が、水戸黃門としての徳川光圀卿、即ち義公が十八歳の時思ひ付きましたして明暦三年（義公三十歳）の時に、この編纂事業を始められて後、寛文十二年に彰考館を設けまして更に本格的に編纂に取り掛り、一層史料の蒐集に或は史實の校訂に、殆んど藩の全力を傾け、永い間の困難に打ち勝つて水戸家十三代、實に二百五十年の歳月を閲して、やうやく當主徳川圀順公の世に至つて、全部の上木を了つた次第であります。尤も其の内紀傳の一百冊丈は嘉永四年に版になつて出て居りますが、その間は寫本で一般に傳つて居りました。そして明治三十九年愈々全部完成の曉、明治天皇御在世の砌、兩陛下に献上致しまして、こゝに義公の志を成し遂げることが出來

たのであります。

二百五十年と一口に申せば、何んでもないやうであります。兎角氣の短い日本人は、百年は愚か、五十年、或は五年かゝりの仕事ですらも、ともすれば途中で挫折けるのが多いのであります。「大日本史」の編纂は前に云ふ通り明暦三年よりその事業を始めまして此の方、明治三十九年迄綿々として絶えず、二百五十年かゝつて、全く其の業を了つたのであります。その間倦まず撓まず、遂に有終の美を成したといふことは特筆してもよからうと思ひます。

三

世間傳へて曰ふのに、水戸は勤王運動の先驅を成して居ながら、さてその事業が完成した曉には、何の分前も與へられなかつた。水戸こそ立つて、天下に號令する所の役割をつとめねばならぬのに、

未だ一人の宰相すら現はれない。まことに哀れなものであると、深く世の中の同情を賜つて居りますが、併し水戸學の眞精神といふものになつて見れば、それは當を得た御言葉ではないのであります。それは建國以來萬古ゆるぎなきどころの皇統を明かにして、遂に日本國民が依つて以て、進まねばならぬ所の目標をハッキリと、自覺せしめたのが、此の「大日本史」の編纂の目的であります。これが王政維新となり、國家本來の面目、即ち民族精神に立ち還つて、國民生活を營み得るやうになつた。その指導原理を「大日本史」に依つて、見出すことが出来るのであります。されば百年の計は愚か、千萬年の國家の礎石を、更に据ゑ直す基礎工作をやり直したのが、「大日本史」の仕事であります。それだから水戸藩の全力を傾け盡しても、決して惜いとは思はないのであります。之に較べれば、一人

の宰相、一人の大臣といふが如きは、固より問題ではありません。されば三百九十七卷の「大日本史」の精神は過去に於て、天を燦す柱と成つた様に、將來に於ても、いよ／＼ますます／＼赫々たる光輝を放つて、我が帝國と共に永へに消滅することはないのであります。これこそ小にしては水戸の誇り、大にしては日本の誇りであります。これは斷じて負け嫌の水戸人が強辯するのではなくして、眞にみな斯様に信じて居るのであります。

四

それならば、「大日本史」の何處にさういふ苦心の値打があるのかと、皆様は直に疑問を起されるに違ひないと思ひます。水戸黄門即ち義公が此の歴史を編纂するには實に幾多の苦心があつたのであります。それは交通の便利な文化の發達した今日の世にあつて、義公

時代のことを御想像になるために、さういふ疑ひが起るので、義公時代といふものは、なか／＼もつて一冊の書物を手に入れることも容易でなく、又一片の材料を尋ねることも、仇やおろかなことではなかつたのであります。義公が四方へ使を出して、歴史の材料を集める爲めには、全く並大抵の努力ではなかつたのであります。それが積つて只今は七萬冊の多きに上つて居りますが、それが大部分寫本であります。そして其の材料を集めるのに困難を感じた事は、譬へば或る大名などは何か自分の家の記録を取られて、國替などの時の材料に使はれはせぬかと危アヤシんで、記録を出し惜んだと云ふ骨稽な事もあります。又京都では某家は摺み屋だから、袖の下の必要があらうなどと當時申されたとの笑話も傳つて居る位であります。そして又義公は一國の大名でありますが、歴史を編纂すると言つても、みな

家來まかせてあらうと御考へになると大間違ひであります、よく細に指圖して居ります。それは「御意覺書き」と云ふ義公の考へを筆記したのものによつても、よくその一端が分ります、そして學者が骨折つた事は、只今彰考館文庫に稿本が残つて居りますが、それを御覽になると、よくお分りになります。それは横縦十文字ヨコタテになほしまして、これでもいかぬ、それでもいかぬといろ／＼に考へ、さまざまに練り、最後の文章には、最初の文章の影も形もなくなつて居るのが澤山あります。

五

又御承知の俗に助さん格さんと申されて居りますが、助さんは佐々介三郎先生の事、格さんは安積覺兵衛先生の事であります。此の二先生は殊に修史に骨を折つて居ります、斯様に義公及諸學者の心血

は字々、句々、一行、一節にそゝがれて居るのであります、これがほんたうの「文章報國」であります。只今の人々は文章をかきさへすれば、それが報國になると思つて居るやうであります、決してさう云ふものではありません。文章が一國の文明と其の進路を示し、又人心を勵まし、天下を動かすところに着目して、加ふるにこれが後世にどういふ風に、影響するかと言ふことも考慮の中に加へて筆をとるのが、即ちこれ文章を以て國に酬ゆる所以であります、單に文章と云ふ一方面から云つても「大日本史」は正にさうであると思ふのであります。而して又義公は「皇統ヲ正潤シ人心ヲ是非シ輯メテ一家ノ言ヲ成ス」とのべられて居られますが、こゝが一番大切なところであります。皇統を正潤すると申すことは、南北朝の時代に於て、朝廷は足利氏の奉する北朝と、楠氏の奉する南朝

と二つに分れて居りました。いづれを正位とすべきであるか、いづれを潤位とすべきであるか、「大日本史」の出来上る前には、大抵は北朝が正位で、南朝が潤位と思つて居たのが多かつたのであります。従つて足利尊氏は得意の地位におかれ、新田、楠といふやふな勤王家は、いづれも不遇な地位に置かれて居つたのであります。所謂名分が明かでありません。そこで義公は史實にもとづいて截然たる断案を下し、南朝を正位とし、北朝を潤位とした爲に、足利と楠との地位が一變いたしました。即ち三尺の兒童といへども、足利は不忠の臣、新田、楠は忠義の臣であると云ふことを、ハッキリと知つたのであります。

六

徳川時代皇威の振はざる時、これに明断を與へ、よつて以て天下

後世に一大光明をもたらすと共に、久しく地に埋れて居つた多くの忠臣義士、殊に楠公の武勳を再び明るみへ引出して來たことは、容易ならぬことでありましたが、元來義公は楠公の志をついたのであつて、楠公は劍を以てし、義公は筆を以てしたので、之は時勢が違つて居たからでありますか、其の目的は皆同一であります。それだから湊川に「嗚呼忠臣楠公墓」の碑を建てられたのも此の一つの現れであります。而して「大日本史」が此の如く日本の國の柱となり民心を一つに合せて、これを導き、これを勵ます上に於て。更に亦偉大なる力を持つて居ると申すのは、之を指すのであります。もし義公が立つて皇統を正潤し、人臣を是非し、ハッキリと明断を下さなかつたとしたら、新田、楠等の忠魂義魄は、恐らく今尙宙に迷つて居つたかも知れませぬ。果して然らば、維新前後の志士仁人、引

いては日清日露の國難に殉じたる、多くの勇將猛卒を興起せしめたところの原動力は、何に求めることが出来ましたらうか、機關車は用意されてゐても、たくべき燃料がなかつたならば、これはどうにもなりません。義公の筆によつて、新田、楠は、始めて此の世に蘇つたのであります。それのみではありません。武家政治以來、兎角將軍あるを知つて畏れ多くも天子あるを知らずと言ふ、幕府全盛の時代に於きまして、義公の「大日本史」は正に、國體を明にし、永へに皇室中心の思想をハッキリとさせたのであります。

七

茲に於て先きには高山仲繩、蒲生君平が出て、又維新の際には、吉田松陰、橋本左内、其の他の烈士となつて、幕末有事の際によみがへり、更に日清役を経て、日露の際には、乃木大將、廣瀨中佐等と

なり、現今は又幾多の雄將猛卒となつて、滿洲の新天地によみがへり綿々又綿々、つくる處なく極まる處なく、今後益々此の國家の大非常時に際しまして、祖國の爲皇室の爲に、舉國一致して世界を動かす處の偉力を發揮して已まぬものと存じます。即ち國家を維持する力も國家を救ふ力も、皆茲の精神に歸着するのであります、そこで此國家根本の眞精神を握んで、之を學問化したのが即ち水戸學であります、この意味よりすれば水戸學と申すものは、單に地方的の言葉でありまして、實は大日本の建國精神たる國體に關する學問であります、是れが即ち水戸學なのであります。

されば明治大帝は義公の此の功勳を思召され、明治三十三年公に正一位を追贈あらせられました、其の聖旨の中に「名分ヲ明ニシテ志ヲ筆削ニ託シ、正邪ヲ辨シテ意ヲ勸懲ニ致セリ、洵ニ是レ勤王

ノ倡首ニシテ、實ニ復古ノ指南タリ」と「大日本史」に關する有難き御言葉を賜つて居ります。義公の靈は申すに及ばず、義公の志を體して、此の修史の事業を成し遂げた水戸歴代の藩公、及び此の事業に携はつた代々の學者達も此の聖旨を拜戴して定めし地下に於て感泣したことであらうと存じます。同時に又大日本史精神の結晶たる水戸學の意氣を体して國難に殉じた多くの志士仁人も莞爾として地下に瞑したことであらうと信するのであります。

以上で私の講演は了りました。これから義公自撰の梅里先生碑文を朗誦いたします。此の碑文は、義公生前に碑を建て、其碑陰に自叙傳を書いたのが、即ち此の碑文であります。之を古來傳はりたる水戸風朗讀に依つて、朗誦いたして見ます。

梅里先生

(義公自撰の碑文—原漢文)

先生は常州水戸の産なり。其の伯疾み其の仲天す。先生夙夜膝下に陪して戰々兢兢たり。其の人と爲りや物に滯らず事に著せず、神儒を尊んで神儒を駁し、佛老を崇めて佛老を排す。常に賓客を喜び殆んど門に市す。暇ある毎に書を読む、必ずしも解するを求めず、歡べども歡びを歡びとせず、憂へども憂ひを憂ひとせず、月の夕花の朝、酒を酌んで意に適すれば、詩を吟じ情を放つ、聲色飲食其の美を好まず、第宅器物其の奇を要せず、有れば有るに隨て樂胥し、無ければ無きに任せて晏如たり。蚤くより史を編むに志あり、然れども書の微すべき罕なり、爰に搜り爰に購ひ、之を求め之を得たり、

微しく透むに稗官小説を以てし、實を撫ひ疑ひを闕き、皇統を正潤し人臣を是非し、輯めて一家の言を成す。元祿庚午の冬、累りに骸骨を乞ふて致仕す。初め兄の子を養ふて嗣となし、遂に之を立て、以て封を襲かしむ。先生の宿志是に於てか足れり。既にして郷に還り、即日攸を瑞龍山先塋の側に相し、歴任の衣冠魚帯を瘞め、載ち封し載ち碑し、自ら題して梅里先生の墓と曰ふ。先生の靈永く此に在り。嗚呼、骨肉は天命終る所の處に委せ、水には則ち魚鼈に施し、山には則ち禽獸に飽かしむ、何んぞ劉伶の錡を用んや。其の銘に曰ふ「月は瑞龍の雲に隠ると雖も、光は暫く西山の峰に留る、」碑を建て銘を勒する者は誰ぞ、源光圀字は子龍。

感想芳信

御揃へ御安健奉賀候。陳者水戸學御講演及び正氣、種梅記朗吟御放送當日は暑氣殊に劇敷相覺候折柄、一入有難一同一室に拜聽仕候光榮を得、滿都の士同感に候。厚く御禮申上候。

雨谷 毅 様

麻布 小林 敏

拜啓、ラジオを通じて久しぶりに先生の御聲に接し、誠に嬉しく奉存候。愈々天下の正聲と相成候。非常時の日本に流行することを祈り候

雨谷 毅先生

谷田部町 中村 忠

拜啓、細雨頻りなる折柄、先生には如何御消

光遊ばされ候や。遠方の地より御伺申候、昨日はラジオを通じて全國に朗々たる先生の御鶴聲唯々懐しみ深き裡に拜聽仕候、小生豫め紙上に先生の御放送を拜聞し、六時廿五分を待ちくたびれ居り候、水戸學の御講義より現下の時局に鑑みての御講演を拜聽し御禮言申述候。先は先生の御健勝を奉祈候。敬具

浅草 小沼 仁

雨谷 毅 様

前文御許し下さい。小生は昨年四月懐しの水

戸工業學校を卒業、目下東京の會社に就職して居るものです。昨夕のラヂオ放送で先生の水戸學朗讀を聞き、一しほ水戸の地が戀しくなりました。在校中は先生の朗讀を御聞きした事もありませんので、ほんたうに懐かしく思ひました所、僕でも水戸學を朗讀して昔の偉人の面影をしのびたひと思ひますが、ぼくに分り易い本を御送り下さい。僕等が學校から行つて御聞した時の印本で結構です。一枚でも二枚でも構ひません。附近に水戸産の人間が随分居りますから集つて朗讀します。では御願迄。草々

潮田 勇

雨谷 毅 様

關 一

雨谷 先生

謹呈、其後は御疎音のみいたし居り、申譯無

先生私は去一日水戸發にて歸濱しました。車中助川の小林君(いばらき記者)に面會先生の水戸學講演及朗誦の放送あるを聞かされ、急ぎ

歸宅して放送時を待つて居ました湊の局長より

も放送の通知がありました。家族中ラヂオの前に正座して御講演と御朗誦を謹聴しました。愉快ノ、こんな愉快はありません。愈々朗讀が放送舞臺に上り、全国的に呼びかける様になつたかと思ふと、嬉しく雀躍しました。先生の音量益々明朗、御講演・正氣・種梅記一分間の休みなく御繼續して少しも變らず、全く驚きました。湊は勿論其他の同志何れも小生と感を同じうした事と思ひます。

横濱 坂本力之介

雨谷 毅先生

(以上前回の分)

雨谷 毅先生

淺草 三宅 健壽

電 文

鴨志田 四郎

ロウトク クワイバ ンザ、イカモ四

拜啓、秋冷の候と相成り申候處、益々御勇壯の段奉賀候。昨廿二日のラヂオ番組放送の折先

生の御名を拜聴し本日は定刻を楽しみに待ち居候。特に時代精神と大日本史の件、時節柄御得意の場面、水戸學の爲め萬丈の氣を吐き痛快にて候。

十月廿三日

湊町 柴田長左衛門

雨谷 毅先生

○ ○
き今日、只今の御話しによりて得る所多き者が多かりし事と存候。時間を定めての朗讀も少し時間があればと存じ候。二回の朗讀放送更に續けられ文章報國ならず朗讀報國の熟語を先生によりて作り出されん事を祈り上申候。

十月廿三日晩

谷田部町 中村 忠

雨谷毅先生御侍史

○ ○
拜啓、秋深く相成候處、愈々御清祥奉賀上候さて只今御講演並に御朗讀誠に結構に拜聴仕り

謹啓、時下秋景、山谷悉く紅葉日光鹽原の出入各所に溢る、計りの盛況に御座候。扱只今水戸學の御講演御元氣に有之、明瞭にして御對話と何等變り御座なく聴取し得られ難有奉謝候。學者は誠に國寶以上の國寶に御座候。前きに栗田先生を亡へし水戸は雨谷先生を偲び御健全を祈るや切なるもの大なり。何卒先生には御自愛御健康にして學界の爲、御精進を祈上申し候

草々謹言

十月二十三日夜

宇都宮 鈴木 鐸三

雨谷 毅 様

○ ○
拜啓、御無沙汰のみ致し居り候。十七日夜の放送まことに上々の出来にて候。目前に接し居る様にて水戸學と國家精神實に近來になき講演と感じ入り申候。定めし此度は御満足の御事と御喜び迄申上候。

十月廿四日

池袋町 岸 秀次

雨谷 毅 様

磯部 白土 弘吉

雨谷 先生

○ ○
拜啓、秋冷の候、益御壯健之段慶賀之至りに存し奉候。今回の御放送、特別大成功、大に奉祝福候。先生には昨二十三日の「いはらき新聞」

啓、昨夜は温容に接したるの感有之、朗誦も

湊町 佐藤龜之介
同 くら

によれば「大日本史」の大講演を御放送なさるとの記事有之、依て吾々は時間の來るのを今や遅しと待ち受け居り候處、愈々御發聲と相成耳を澄して謹聽致し申候。しかも先生には要領骨子々々と摘んで益々御話しが進んで参りますと現代國民たるもの、一語も聞き漏してはならぬ要点を次から次へと御發聲に相成り、さすがに先生の博識にして、材料の豊富なる模様も窺はれ亦其の御話しが從容として迫らずと云ふ態度で説き去り説き來るのを實に愉快に拜聽仕り候。今回之御放送により先生の希望とせる、水戸學鼓吹の目的も益々世上に認めらるゝに至り、誠に悦ばしき事に御座候。先は不取敢、御祝迄委細は拜顔の節可申述候。

十月廿四日夕

匆々拜具

拜啓、昨夜の御放送は誠に結構に有之、最初より謹聽いたし候。而して最後の結論に萬鈞の力を發見いたし候。昨夜御講演の原稿は雜誌になりと御發表に相成り候哉否也、「梅里先生」の御朗誦、是亦老兄の音容に接する心地して拜聽いたし、終りて後自ら實演を相試み申候。豫定時刻の二分前に結末をつけられ候点も亦感服敬服の一つに有之候。小生も四回程放送の經驗有之候へ共、この時間を上手に費すこと中々六ヶ敷ものと存候。

先は昨夜の感想を一筆申上度如此に御座候

拜具

十月廿四日

麴町 (醫博) 小池 重

雨谷 毅 様

謹啓、昨夜の御放送拜聽、縣として近來之快心事に有之、爲國家欣快に不堪候、折角御自愛被遊度、御喜ひ迄如此に御座候。

尙御序の節音譜吹込の朗讀印刷五十枚計り御送り願上候。

拜具

十月廿四日

新橋 鈴木成之介

雨谷 毅 様

拜啓、時下秋色相加り候處、愈々御勇健慶賀

至極に奉存候。陳者昨日の放送は早朝より心掛け一言一句も聴き洩らさじと用意致候て、午後六時廿五分に家族一同ラデオの前に集り拜聽致候處、音吐朗々たる御講演に續いて御朗誦に今更ながら感佩措く能はず、特に乍失禮昨夕は尤も上出來と拜聽仕り候。全國津々浦々迄、我國固有道徳たる皇道、即ち水戸學の眞髓を鼓吹普及被爲候御事を深く奉感謝候。不取敢感想を申上御挨拶迄。

十月廿四日

祝町 中根 環

雨谷 毅先生

拜啓、其の後は意外なる御無音に打過ぎ申譯有りません。朝夕大分涼しくなりました。小生

毎日元氣にて業務に勉勵致して居りますから御安心下さい。十月廿三日夜六時四十分頃夕飯をすまして食休みをして居りましたればラヂオで「梅里先生之碑」の朗誦をやつて居るので聞いてをりました。雨谷先生がラヂオで放送をしていらつしやる事をすぐ知りまして終りまで聞いてをりました。相變らずばらしい元氣で朗讀なされ、何ともいふに言はれない氣分が出ました。小生先生の朗讀の感に打たれて一夜喜んで色々な事を思ひ出して居りました。昨年上京しましてから始めて昨夜はラヂオで先生の朗讀を聞きました。實によくて尙一層よいと聞きま

り、之を十月十五日迄つゞけて居りましたが、今は仕事がいそがしくなりまして運動の方も朗讀の方も出来ずに働いて居ります。休みには上野山へいつて朗讀をやつて氣分を味つて居ります。富士山へ登つた事や色々わしい事は何れ伺つてお話致さうと思つております。草々

十月廿五日

下谷 益子 喜雄

雨谷 毅 様

○ ○

した。小生八月五日六日に富士登山しました。六月十日の時の記念日から、毎朝池ノ端でマラソンをやり、それから朗讀を一回やりまして歸

拜啓、前回は横濱にて先生の御放送を拜聴、今回は縣北崑郷の山奥にて再び御放送を謹聽仕候。益々御壯健、元氣撥刺朗々たる御放送、嬉しく天にも昇る心地仕候。「水戸黄門様と大日本史」最も六ヶ敷く難解の点を併も平易に説き大

々の感動を興ふると共に、梅里先生の碑文朗讀にて極を結びたる處、天晴れな、又愉快な、有益なる御放送に有之候。先生でこそ大英斷を以て斯かる御放送も出来得べくも他の仁にては到底出来得ざる事に御座候。前回の御放送も頗る氣持よく拜聴せしも、今回はより一層肝に銘じ候。之れ或は御講演と朗誦が離る可らざる結果かとも思はれ候。小生は唯だゞ感激する許りにて、筆にも口にも表現し能はざるも、先生の此の場合に於ける御感想は如何にや、何れにしても先生多年の御研究其の功空しからず水戸學がラヂオ放送により益々全国的に擴充しつつ、ある事、欣快に堪へず候。

上度存居候。亂筆御用赦被下度候。

敬具

十月二十五日

崑郷 坂本力之介

雨谷 毅先生貴下

○ ○

何れ其の内ゆるゞ參上可仕候。奥様へも宜しく願上候。いづぞや御話の事もゆつくり御話申

謹呈、今回の御放送益々鮮かにして實に皆々驚入り候。時局は益々先生の御活躍を要し候御加餐御奮勵祈上候、反射爐原型を復興させる企願も、小生の陸海、文相の御賛助を得、蘇峰先生の絶賛を得申候。矢口先生の今回の御援助は眞に感激の極に候。熱海に東郷吉太郎先生を訪れ一日御教をうけ候。東郷閣下は廿七、八日湊へ參つて講演して下さることに相成候(本日決定)。何卒一同御來遊を祈上候。右御祝詞迄

草々

十月廿五日夕

雨谷 毅先生侍

關

御 撈 挨

愚生先頃依頼に依り本文の通俗講演並びに朗誦を東京中央放送局から放送いたしましたところ種々激励と御同情の御言葉を賜り忝く存じてをります。右に載せた御芳信はその一端であります。尙この講演文を梓に刻んで、大方の御叱正を乞ふたら如何と申される方々もあるゆゑ、この小冊子をものしました。何卒御叱正の榮を賜はらば幸甚と存じます。(著者)

昭和八年十一月三日印刷
昭和八年十一月十日發行

三六

版權
所有

著者兼
發行者
雨谷 毅

(定價 二十錢)
送料

水戸市常磐町彰考館内

印刷所

三浦印刷所

右代表 三浦七郎次郎

水戸市常磐町(雨谷方)

發行所 正聲會

新水戸學研究叢書

見よ水戸學の眞精神眞面目躍如たる本叢書を

第一篇	水戸學と農本經濟	雨谷 菊夫 福原 武 共著	定價廿五錢 送料二錢
第二篇	水戸學と民本主義	雨谷 毅著	既刊
第三篇	水戸藩の社會教育	雨谷 毅著	既刊
第四篇	思想問題と其對策原理	雨谷 菊夫著	續刊
第五篇	政治の現實と理想	雨谷 菊夫著	續刊

水戸市常磐町雨谷方
新水戸學研究會 發行所

朗 讀 コレ ド

會 長 雨 谷 吟 龍 先 生 吹 込

番 號	内 容	作 者	面 數	枚 數
1	梅 里 先 生 (和文) 山	德 川 光 圀 卿 安 藤 年 山	3 1	2
2	偕 樂 園 記	德 川 齊 昭 卿	2	1
3	種 梅 記	同 上	2	1
4	正 氣 歌	藤 田 東 湖	3	2
4	先 哲 詩 文	光 圀 卿、齊 昭 卿 東 湖 先 生	1	2
5	落 花 雪	(太 平 記)	2	1

○このレコードによつて水戸の氣分にひとり之を口ずさんであなたさ云ふもの
のを淨く活して下さい
○家庭の團樂にはその温情をいやが上にもかもし、會合の席には自らその氣
分が統一され、教場に響く朗々の調は若き生命の培ひとなり、ヒクニツクに
かそかな疲れを休ふべく耳を傾ければ聲は蒼天に充ちて人と自然と一さな
りこの融合から醒めて驚くであらう
○レコード御購入の方には朗讀文を添へて差し上げます
○また「朗讀文集」が用意してありますから、御希望の方にはお願ひいたします
朗讀文集(定價金十錢 送料二錢)

(きつに枚一)
價 定
Y 1.20
共造荷料送
Y 0.20

申 込 所 正 聲 會 本 部 水 戸 市 常 磐 町 雨 谷 方

終

4
7
(定價十錢)